

91156
S.61

911.56-Sa61ウ
1200500756845

物
兩
寸



始



詩集

夜よ

雨あめ

す



911.56
NA 61

雨の

す

真田喜七詩抄



22.00
67A

装題

釘簽

高村光太郎
齋藤昌三



序 詩

枯草の上になれば
あかくかかつた虹が見えるやうだ

この瞬間である
そして

詩人の言葉によつて
再びふみ行はるるこのしゅん間である
おお

いのちはいつも虹のやうに明るい

目次

詩集 夜雨よはあめす

序 詩

第一部 近作詩抄

機と苜蓿の花……………六
 米耕のこの心を……………二
 われら農夫の詩……………二四
 あの幻惑の戦艦を……………一八
 黄昏……………一〇
 霏々たる光のかけ……………二五
 檜原の空……………二六

~~1008~~
~~79~~

第二部 雲の時計より

樹木と神……………五一
 人世に……………五三
 秋に閉す……………五四
 冬の日……………五七

白茅の秋	五九
樹木と神	六二
三日月	六四
風景の一齣	六五
朝雲	六七
失へる章	六九
秋	七〇
五月の花	七二
敵	七五
芒の宇宙	七六
青き碑牌	七九
景氣	八二

曉閣の花	八五
水 寰 區	八七
山房初秋之圖	八八
北越古利之情	九〇
水 寰 區	九一
この宵壤の中に	九三
冬に入る	九五
春雨	九七
エリゼエの第一書	一〇一
候鳥	一〇四
扉	一〇六

第三部 誕生と死より

ある蟋蟀の唄……………二二

無題……………二二

時間の祝祭……………二四

平野の鳥……………二七

もめんの花……………二九

秋……………三二

秋に想ふ……………三三

それなどは美はしと……………三五

雄叫び……………三六

ある蟋蟀の唄……………三九

廢園……………一三一

豊美なみほとけ……………一三五

半獸的な鳥翔……………一三六

雪嵐の世の島……………一三九

人間像……………一四二

背景……………一四六

豊美なみほとけ……………一四七

雨月……………一五〇

爽涼にゑがく……………一五四

花の中……………一五七

石山寺の花……………一五八

峠	………	一六一
法燈の空	………	一六五
十二月八日の一家	………	一六七
山上の歌	………	一七〇
雪の貌	………	一七三
花の中	………	一七七
會ひ難きもの	………	一七九
秋	………	一八一
冷	………	一八一
海について	………	一八二
鏡に拾ふ	………	一八六
秋冷	………	一八九

第四部 詩と散文

さえざえと夜鷹は啼く……………一八五
 秋の言葉より……………二〇四

跋

鶯の來る庭での對話 高 祖 保
 發行者のことば 笹 澤 美 明
 卷末に 著 者

畢

夜
雨
す

第一部
近
作
詩
抄

近作詩抄



昭和十七年九月より
昭和十八年十二月に至る

機と苜蓿の花

松尾芭蕉は――

遠來の友と二人ゐては

命ふたつ 中に活けたる櫻かな

と詠ひ また初夏の日光山に詣でては

――あらたうと青葉若葉の陽のひかり とも
感涙に噎びたり

芭蕉でなくとも、けふわが檐端に

藤浪の花紫に垂れて 青芝のうへに散りつむ
他に花しなけれど

老へる母あかるきかたにさしむきて
端坐瞑目してゐたまふ

ああ かかる五月の芝に降りたち

その眞^ま央^{なか}に育ひし苜蓿の一簇

そが白きうへにかがみ

顧みすれば

初夏の廂に陽を遮らせつつ

ふかぶか一人母は坐したまふ

大東亞戦争第三年目の夏首め

警報發令下

松原ふかき海邊の時にあり

老鶯あまたたびなるを――

ああうまごやしの、筆けしばかりなる この叡智の花どち、

眞上の機の圓轉 半轉

急降下 大地うちふるはず その轟音にこたへ

空ゆくものの一途なる意志に應へて

ふるふると花も伸びあがる如くにて

そこに屈み

頭上の音に心くばりてあれば

機と人と花だち 仰ぐとしなければ

命まぢかに通ひゐて たまゆらのそれにとありとも

はふり落つるもの吾が頬にあり

われらいま日本の反省の中にある

深いいのちの省察にあり

高性能機の眞美にふれ

その時を前にして

青葉若葉のひかりにつつまれ、われらいま

松鳴る風の感恩にあり

とどろく歴史をわれに生き 生くるは機のみならん

無限の過去の集積の裡にたち
物象のふかいうるほひの根源へとちかづく

米耕のこの心を

あの音は あれは
はらかな潮騒にあらず
しばしきこえ 人聲にまじり
聴て静かになりゆくあのおと——

その水音のはたと胸を叩つ
ああ 百姓田ひやくせいをうつ
あはれ聖の世の樂なり 雅樂なり

喧騒にあらず

しかもみやびにあり。

族はらから急なる日

道恒にあらたに

ものみな蒼く幽暗く さらはこの明海

万象その底潔し 生死同次元

いのちひとつなり 錐の

おのづから囊を出づとやいはん

それぞれに處をえ 極限にあり

米をつくる 作るにあらず 尋常と異り――

こめはこれ捧ぐるのみ 利刃の緊迫感

米耕のこのこころ常恒に純まことう

いち粒よく造化の妙とあらたを頌へざらんや、

世阿彌 利休の 道これを出でず

道われに出づ、修すべく行はずべし

ああ千古を溯つて解かれたる臣のこの心を、未曾有のみいくさにならば

悔いなく稔らしめばや 悪鬼と壘断と盲執と

偉大と神慮と混沌未分の、

歴史を兩断する世紀のみいくさに捧げて

悔いなからしめばや。

われら農夫の詩おほみだから

この國土に生れいでしもの われら農夫ぞ
誇りの土に死なんかな
けふにしてあらしめず、我等敵を利する徒を
血を以て飾れる大東亞の光輝を
畫餅に導く利倍の徒を 不二なる光の民われは、
榮え、けふの試練の莊嚴する土にあれ

蘇りなん

篤農に打たれて生動する土の如くに
この一條の欣求こそ鐵桶のそなへ 銘記せよ
靈威は人のみをとほして具顯するを
——指導の末端にいたるまでの血が生きいきと
音たててよみがへりなん。

秋の高きところにうたれて、さすれば
陽にほとばしる八束穗は五倍する
秋のしろきひかりにうたれ
生産はけふ五倍するを
それが、年の終りには十倍たらん

われら農夫ぞ 美しき誇りの土に死なんかな
狂濤の國難の日に 浮華跳梁する唇を 舌をあらしめず
使僚商賈の徒、私慾になへし敵を利する手を
かかる鼠輩をして断じてあらしめず

——われらいささか地均しのために戦つてきたのだ

けふの日にそなへて我等闘つてきた！

我等酒でいつばい、

叫びでいつばいだ 國民よ 勝利せよ

國民よ銘記せよ

素朴なる琴線の陶冶こそ

戦捷の基盤と不離なるを 断じてそは不離なるを

芟除せられよ、

蒼蠅を打て、打ちて不二なる光のもとに蘇りなん

指導者の末端にいたるまでの血が 生きと音たてて喚ひびなん

あの幻惑の戦艦を

あの蒼爽と 水平の雲間から現れる
夢の天主櫓のやうな戦艦の美學は
どこからくるかと少年は汀に立つて考へた
これぞ無比なる精神の傳統する 眞日本美の
神髓なるに想ひ到つたのは忽ちであつた
時いたり 最後に おもむろに
邪惡に閉された世紀と世界にむかつて
その艦は火を吐いた 兩洋の雲間波間に

仇敵も驚嘆と讚美をささげる中で
しかし哀しいかな 敵は 不覺なる敵は
その艦一つを損ひソロモンの波に沈めたるぞ
日本には日神、風神、大君がしろしめす
いま天帝の正義の座す戦艦なるを
鬼畜は識らずして沈めたるぞ
彼等にはもはや宥されぬ やがて七つの海も
神々の怒りに炎上する日は來た！

黄 昏

黄 昏

四郎君来り別る君征士となりこの祖
國の自然を想出づる日あるべきなり

まだ嵐が命脈をおさめないうちから
ゆうぐれば 無限の金粉を浪費する
老齡の松が枝は金泥の中に浮いてゐる

野分のみそぎする哥のあとから

膚が——漂々とうたひやまぬ
今宵くる人はみな物語りめいてゐる
魚鳥さへもものがたりめく！
灑がれて 深慮の星環は
豫測の些んの一部をささやく すでに老宇宙は
この秋の全貌をつけてあますところはない

こよひ大地は生々とうたひやまぬ
西にひするの山脈のあることはいとも宿命的である
假に この世界のはじめの色どりにこのこつて
氣にはずむみどりこの瞳のやうに睡らずにあることは

柳 樹

征 子

上に 睜みひらく

天麗の自然を信じて自己を正し得るものは幸である

自然の偉大のめくる頁の中に

黄昏の下を去りてゆくおとと從弟彼方に

黄金の柳樹の 客となる

霏々たる光のかげ

君よ 會堂に狂ふ雪を見るか

高窓を透して薄れ行く光の空に視入るや

いま地球が 地軸が —— 兩つの大洋が、不毛の島が

大鳥の翼が吹雪の綺目に折れる

分ちなく雪は黯い世紀の帷をつづる

夏の雪は狂ふ 會堂の中

参じたるうたひと詩人われら、

ああ 霏々たる光のかけ
ここを埋むるは傷病痕の兵等
これら人々にして これら神々
ここに照示したまふ神 世界に語りけらく 「かくて正義あり」
「撃て！」と

——ああ 存在に火が燭る 雪嵐の奥處
民族の記憶を神話が反映するといひし人を想ひ——
これは波の千鳥の幻想曲か
これは光よりも苛烈な 祖國の靈の絶點、

すぎ去るものは「比喩」にすぎず 宇宙の裏側^{うらがは}

世代が喪失した澄める蔭を探せ
魂のリズムスを 光の 投げ來る合圖に觀入せよ
飛雪の謎挿りうごかし嚴肅と畏敬の根をかき起せ！
管絃はよんで碎け 物理の時はずれる……
われら捧ぐるうたの根は 大悲哀の底に立てり

檜原の空

車室はすすしく

わが讀む詩書のうへ

光はあかあかと白日の下のやうに照り映え

文字等はひかりにてりそうてゐた

それ等は腫を輝かせ

あまつさへ眼底に泗と躍つた 汽車は爽かに

歡喜の態に突きすすむのだつた

これが御戦のもとの日かとおもふ

これは國運を賭けた祖國の力

常恒にあらたなるものの稔りゆく相

黙せるも 語れるも 大いなるみ國の意志のままに練みられ

些の邪思あるなく

神代ながらの恩寵は成りゐて ああ

一つの方途に合掌するばかりだつた。

感覺の分野にも

被禊の時は成就した

あしき果實この野に墮つ、

——かくて偉大を信ずること

白晝が紡ぐゆめの綾糸こそ このいまの耀へる現實

鮮人夫婦の麻着さへ 涼々と風にはらんで

われらの世代は交替してゐた。

黙思せよ 轍の運ぶ輓轡の音 わだちに絡はる萬雷の叫び

澄める檜穂の空に塗るは

いま愛しきひとつの音色

これぞ東洋の聲――

鯛はあたらしき世の帛を裂き さく！

信ずるに勝つことなし

寶永もけふまた晴れて

あらたなる四十九荒御靈のそらによばふを。

この日眞珠灣上空に散華せる海鷲
四十九柱の偉勳上聞に達しければ

夜雨す

生死憐むべし雲變更
迷途覺路夢中に行く
一事を留めて猶記す
深草の閑居夜雨の聲

道元

眠りのたりた心で

ここに來て降り立ち

野に迷つた道なればこそ

雲が 斑雪に おき覆ふ下に

夜はなにもものにもすなほに應へる
事實雪解の記憶のみちのやうに
ほそほそとこのこころ怡しかり。

空の月から水銀の微妙な一滴が

睫毛を窺めて趨つた 夜は雪解のみちのやうに

友よ 明暗ができばくである

それはもこころ貧しく人のがりゆくをしりそめしより。

生駒もあをく懸つてすんでゐよう

嵯峨のかたもそうだらう

さらでだに清新なよにあつて

道の遠く難きを想つてみる。

明るいのに、降られました」それは久闊を敘する私の言葉、

ちさくとも果しえた約束から、心静かであつた 劇甚と妙い機會の中にあつて。

——時雨ですね」友は猶ほ瞳をひからせた

夜雨す 巒旅ねむらず——

生死事大

只一事を留めて醒めてなほ書きつづる、

友は澁みの美學を愛し

わたしは簡素をこそ尙ぶ、

千歳一遇のときゆゆしいま

「結ばん未了の因」と、「野郎自大の聲をなすは日本に唄びよ」と。

古事記にかへる

嚴冬午後四時のさむき太陽よ

大日輪 そなたはいづちの激湍の岸にあれし陽や

けふ東京帝大大講堂の廊下のうち小暗く

そこに寂たる人列は何事

われかつてかかる肅然たるをしらず

みくにぶみ古事記を見んとする人々なり 神々の裔なり みよ

深く炎ゆる眼を 證かなる血の昂ぶりを 敬虔なる肩尖の並ぶを

天の安河原につどひし神々とてかくありなん

地球の屋根に生命の源流を見出したものの想ひに

空ちかい園生の 日高見の花々が 群れ 揺れる……

渡る日の影も隠ろひ 天雲銀杏の木末に歌ふ外の面に

高天原の樂の音がちかくきこえる あの機之音も

二上之峰また 峰をしたひて國覓げる

ひたむきな情熱 いや紹ぎつぐ 思惟の形と對し

——小竹の葉のさやに

さやかな 上古の血の響きにいまは壓される

大王は神にしませば

朝日さし 夕日差し

笠狭の碕に 風も清ければ波清し ゆゆし

西方の曆、千八百二十六年九月

ギョエテは沈痛な納骨堂の裡にたち 微のなかより

比類なく見事なしやれこうべのうへに書かれし

神聖なその文字を読むとうたへり

皇紀二千六百三年正月の小暗きひ 聖き群列に交りてここに

東洋の詩人一人

それにはあらず 山と海との

玉 珠の 建國の事割に額づきぬかづけり

ギョエテに「シラーの頭蓋骨を眺めて」の時あり

再び海に來て

これぞきのふの海にあらずや

風喚ぶところにあらずや

蒼茫として 日の没る邊に

吾らしばしありてまた

とほき初めの人のごと 別れしはこぞ

その日 霖雨をはりぬ 君も征けり



これ昨日の海にあらずや
みなおらぶところにあらずや
わがこころ疾し 飄風よりはやし
はまいきみ紅に咲きしける 潮風の下
長汀曲浦告ぐるあり
時代と永劫の鐘すなり

この砂に立つ
空の櫓ありて 寇護る はやいくとせ
勁き子等 そが根に戯る

——神とまで遠き祖先の

素足のあとあと、
遺る砂の淨らならずや
いまし來て この濱邊
潮ほ盈ち揚げる、
まなこ放ち 千態の波の業におどろく
されど ああ けふの時
われらとて 空もる望樓の邊に
捧げあまさぬこころ根もむかしに劣るものありや
襲ひこん燕雀に たれ鐵壁の構想も
嚙昔にかはるものありや なしや

細雨霽れゆく

ことのさやけし

神と人と

このひとときの静かならずや

かくこう

男鹿半島から

何者か袂別せよとつけてゐる 何者にもけつべつせよとつける この夏空の銀盤は
あかるい とき折に かくこう かくこう と呼ぶは鳥 松の林をゆくと どこか
らも どこにも秋のやうな瞳がながれてゐて ふかい木末から呼ぶはその鳥だ

ああこの氣持はあかるい 心ここにあることの
色合は穰かだ

遠くにきてけふもちかい このこちはよいな これが宿命の明るさ どこからと
もなくきこへる 透きとほる笑ひごゑに

——薄明^{かた}は仔馬と むすめでゑがけ野の山嶺を

りんごは酸く 鴻はまあをに 海はうすにぎりして假粧う ど どど とかへす
ああ澄める松の林をゆくその折り……

をりしもよ 黄と紫にぬれた眩惑のはな葩で装幀された 掌^てのなかの書物から か
なりやに像てやや老へる鳥がたつ とほくも去らず それはわたしをもみない 脚
で花をふみしだき はなのつゆを啄む ——不死の運めの鳥よ ああ この夢幻の

夏空の銀盤は凍えるやうだ……

——あら野にむすぶひとときの 永遠者のゆめにすぎないけれど 明るい秋の枝
枝のやうに いまやいづれの上枝^{はすか}にも稔りあらうとする！

山のなぞへの空

いづちを見ても山頂きばかりなる

こは峽はざまの早春なり

厓はたに立ち 草萌えず

黄櫨はぶを手折れば滴るものなくて

ただ淡黄たんわうなる木心しんをぞ包みてありける

頬白 一羽

また一羽

無言の春

木樨はちすの篠 道に立てり

へだてたる谷々の梅が香幽ほつか

三月の山の貌なほ暗く

見ときし天城のみ 雪に映りて皚あきを

あやしくもわれもの狂ほし

夢幻の入江をさして峠を下らんとす

流れ水 氷を乗せて走り去りぬ

生活の思惟の裏を返しよ

春は

山のなぞへの
そら 谷の切れ目なる 空

そのそら蒼々われらの生涯に光を放てり
無なるに似て 無なるに非ず
孤なるにあらず 悲哀にあらずして
笙々と鳴り そのすべてにして

在、非在を超え ここに滲透する春にてありける
二律背反するさ中より かしこに美しく翼と炎えぬ！
生命の愛すべくあらたなる理由にみちぬ
ああ内在の あまつなくこの空 山の傾斜に芳香をはなてり

ますらを相模の小野に遷る

中秋の望の月すぎて
二日三日なる薄れ日のおもてに
銃劔の林壯んなり
稲葉晃軍醫大尉のほねこのときにもどる
蟲の音しぬびぬ さはに、 さねさしさがみに
不盡 足柄のひかりきゆるときなし

中秋の月にほひ 虧くるころはも

霜のつるぎ さむく潔し 伯勞鳥なき透る

ここなる小驛に ああ

艸莽へる柵に芙蓉花さきぬ

びんはつうすく君嫁てる おんはは

——きみ温顔 天平の

をとめのごとく咲容ふ

天日わづかに紅く とけて哀し いま

彌高きもの古今この野に徹る——かつての寂寥の友に

きみの桐の小箱の布に

そこに退く北支の夕ばえは染みてさやけし

かの苦戦の夕なり 大陸の残暉の手前なり

直彈下腹部を貫通す

三日月渺かにありしといふ

骨騰肉飛、最前線に傷める兵等を手當しむたり 四人をおへしときにして

きみ鮮血にそみつつも更になほ 兵長の傷は浅いぞ と

最愛の兵一人を治療せり——

蒼白修羅鬼神のごとく立ち上りぬれば

陛下萬歳を口稱するただしくみたび

莞爾として終焉んぬ

いにしへゆ負ひてきにし名

君や鎌倉男兒の裔 美しく山河とまみゆる日

みよやああ 部下の褐色のかひなにあり

きみわれらのまへに還りきぬ われらの眼前に過ぎゆけり
いまも遺影^{うしな}おほどかにゑままひつつ
著きは旌のみにあらんや

かたり繼ぎいやつぎつぎにみ祖より
千古をつらぬけることば小野にあり

すめらべのみち 浅茅野に見ゆ

汝等^{いましち}益荒男のとも

みねの岩根に名はうづめよ さがみをの子ら

天際も隠るふなき 明けきことはりに復歸すべし

第二部 「雲の時計」 より

樹
木
と
神

昭和八年十月より
昭和十五年六月に至る

人生に……

繪を見ては一日

繪の中にあるはなやかな心地せり

塑像を見てはその日、

彫塑の中に立つ謔けき酒に酔ふ

詩書をよみては、

海洋の波の、裕き飛沫に身を抛げる

ああ この時この時がかくは美はしく。

このころ悵慵とひそやかな夜明の月のごとくあれ……

秋に閉す……

秋深し隣は何をする人ぞ

風雪に可愛がられそうな坂下の黒い家並を、

何を送生よすがとするか、この谷の

ひとかたまりの、明治大正の家々の粗悪な家根瓦を

高臺に傾きかけし私の家根裏の罅から眺める。

電柱は谷のひくい天に刺さる、——秋も

晚いころの晝すぎ

けれど、黒い二階建二戸住みのこの家の群れは美し、いとほし、夏の夜は
一様に蚊帳つり、窓べにしつらへたる型ばかりなる物干に凭り涼む人たち
なべてのまどに七輪と白い洗面器などならべおく
いつのまに、また木枯に閉したる浮世の裏の繪の家いへなれ……
見て過ぎし世のさまの、
祕密らしきものありて、おほむねに、そのなかりしを。

ゲーテを読む、密柑水のごとくこころ甘くうれしくよむ。

戀と謙讓と牧と少女と水と雲

暑さ寒さの人生と、涙とともにたうべる糧ほん。

信と未來と、迷ひあれば生甲斐あるうつし世の詩を——

雪解の水に掬ふごとくこころ脹らせてよむ

おもひも曇るこの秋なれば 知らぬまに

閉して開かぬ、蔦かづら匍ふ家の扉すぐ私の隣りにもありたり。

冬の日

犀利なる、

水脈だてる

吹き落ちしもの、

さむきもの

謔もれるもの

あたたかきもの。

苛烈なる

懣らふる

幸なる 不幸なるもの、
眞珠^{まじゆ}なし、一塊の石にながれ堰かるるもの

無をくぐる また

ひとどきの 冬の日の
陽ざし……

白茅^{つばな}の秋

渚には神祕が棲む

捲きよせ捲きあげるときの謐かな神 その神が

けふ私の心にもすむ……

白茅^{つばな}は末枯そめる 血の色に 杖のさきに

背に明き陽だまりが落ち

衿と羽織きて あたたかな秋とはなる

あのやうに濁つてゐた私の心のそばに

降り罩められてゐたきのふの富士に――

砂船のかけ乾涸らびた小鯛のしろい眼窩が波を枕に

あやしげな 黄金の満月に描く未来

その黄昏はまだとほいのだ

……ささ濁るあらい海のほかに

うしろにけふまでの薄明を曳き

白くしてはなれぬ道ひとすぢをひく！

渚は鞆の唄ごゑをあげる この逍遙路で

ああ甘美あましいうた……

そのうた聲がこえられぬので

私のいまは霧のやうに不たしか――

富士がこの秋の最初の雪で 雲際に

雪白けいぶの肩衣かたぎをかける 私の時に 日に

樹木と神

私の植ゑた樹は 私によびかけてゐる 大樹とはいはれぬまでも
もう緑簇らがる天蓋をかけ 繪の具のやう
新らしい苔を根と幹の日々に染め
私によびかけてゐる、「早く神になれ」

私の祖母の植ゑた樹は心悅しい 私に
まだ時の中に生成を止めぬものの姿で、
池の表ての千切れ雲のやうな、いくらか寒い斑を泛べる樹皮
——私の身に近い掌さへ思はれる……

祖父の植ゑた樹々は 曲つた枝々を
空間に失つてゐる 薄明に遁げゆくもののやうに。
響と、哀しいその天をいつも上枝に
樹は私を叱らないまでの樹齡となつてゐる

私はもうこの家から出ることはできない死の夜まで
木隠れの家で、——まはりに散りくる赤と黄の病葉が
さまざまの言葉の身振りをする 私はいま言葉を怖れるのだが

時の童女とただ二人ゐて、私に生の貴ぶべきそのほかのことは識るを宥されない
私の植ゑた木は私を譴つてゐる 沈黙のか黒い石になれ、石になれ。

三日月

私は誰もゐない濱邊に降り立ち
そこで息をひそめる

後ろの小山の背に濡色の三日月が落ちかかる
暗い沖の動きが仄かに感ぜられ

——もの聲もなく、手近かなものの生れるる夜よ！
このひとどきのやうに不たしかなもの 莊嚴でもないものを
私がかつて知らない

風景の一齣

數日よいコンディションで筆が運ぶと

人間が限りある時の中に生れてきたことまでが

それとなく有難くなる

多様な梢に海が早春の風鳴をつたへる岬の突つ鼻で

私は見てゐた 啼けない藪鶯をまねて

死が暗い海水の下で泳いでゐる様子を

退紅色の細い水平と——

おなじ色のその波流が沖の島根をめぐる
左手に伸びたひくい岬の輪色の終端を

最初に私をとらへた この浦江の暗碧の浪
鮮明な彫刻の 刀痕の波頭 手前のくらい
逆光の中のことではあるが

死とはこのやうな

閑雅な白晝の一齣であるのを私は理解する

朝 雲

小山の頂は朝雲にかくれ

中腹には共同墓地が

小旗のやうに卒塔婆に飾られ

下界の歡樂境はまださめぬ

死はひとり 美事な方位にゐる

失へる章

秋

庭すみの わが小さき家の
折ど入らんとすれば
背筋あをあを黒きしまのびのびに
あをがへる 暖きかたへとべり。

もの書くとして机に凭れば
——四五日の雲風くもかぜのつめたたくて
日ごろさだまれり 懈怠なる
おもひ 秋とはなりしを
けさあをきもの心こゝろに飛びぬ
酒もなくて あかるきかたへひとつ……

五月の花

晨の花

池の魚

……昨夜の月

こひしかるべき夜半よはの月

葩を

むらさきの蘇枋すはちのはなを

索ねよ

五月

美しき五月なれ

たらはぬわがこころ
足らしむべからず

石
上

蜥蜴 いつもおなじ石のうへで佇む蜥蜴よ

未
來

だが、何がどうなるにせよ、貴いこの人の生よのことであるなら

敵

詩人にもし友があるなら波濤である
もし敵ひるがあるなら、淡ひるがりである

渚の 晝の

枝の曲りの空間の 私の正五邊形の閑の 夜々の

敵は、それが全世界にまで育ひ立つとき……



芒の宇宙

すすきが無縫の秋に放げることば……

秋はすすきに無明の花文字をつづらせる

芒ははなのしろきを珍づれ

五線紙のうへに頸もたげたる楽譜のやう また

風なきにちりたつ群鳥のさまにもみゆるか

芒のいまだ逢けず ちかきは飛びがてなる白きあり そのはなの

暗きには 穢れのみゆれ

とほくして塘の小笹に交らふそれらは
潔き小羽を風に撒きたるやう ただに
いちめん 波爽ぐさまにでもあるか……

天日もあるらし 薄き日影に小松ばらつづき
川瀬の韻もあるらし この虚脱なる まして
秋もすゑなる曇る午の かかる刻の落下を
ありがてな宇宙として

怡しむや われ!

すすきには現身などなきやうであり

天と地と 平等の淵に塗られるる央か

これも智慧の 芒がわれに抛げる言葉！
こころいたみ 傷み 無明無始の花文字のうへ
泛び爛ふ生きといのちの艱く哀切なるをわれはよむや……

青き碑牌

わきて青春の
雪と紅と暗灰の色彩をうしなへるより
霰散る一日の蒼の諧調に
眼は住せんとする

山蔭の 木下闇並むる墓石の青
その型ち一つにしてひらたきばかりなる……
けぶれる雨に涙ながし その四季を通して 枝もる雨になみだぬらし

そばすぐる歳月の駒そもわれになにを教ゆる
人の日々いまだ美しくありし世に死せる
鄙がの女の幸ちをば語りつぐるや
身の憂かさ怨かつばかりの標しるべにてもあるや
こよなき秋のひはなほ蒼あはなる樹下の碑牌はよ……

山田の 段々畠の 畔はなる黄檀はじ

深山木の愛づべき蒼さ湛へる朴一木その中に
陽の謠もりになにを語るや——
もの深かに雪の斑あうかべたちるる その姿勢

人知れず淀みるる淵にさく 淪漣なの花

こころ老來おいらの繰言とのみいふや……
世にかかる色と諧べ、蝶花にまして
想念のかげの覗ける想ひ

かの懐出のつづきの墓よ 一樹よ
流潭よ さはれ眞白なる波の鳩
ましろにも咲く荒き海のよにありて
定住のこころいま得がたけれど されど
吹きも荒あばず捲まきも返さぬ曲しるべなしとはなさず

深みるる陽脚もあをく冷たきに
飛沫にもあらず こゑにもあらず ただ大いなるものにそそぎゆけ

景 氣

波死し風風き星光天に滿つる拂曉、油頭附近にわが精銳敵前
上陸す、と大本營陸軍部の發表ある昭和十四年六月二十一日

先刻御承知の筈でもありません、皆さん、世の中で
一番よい帯は藝者がしめ、よい衣服も藝者が着る。
それは百貨店などで買はれもせぬもの、お蔭で
銀座のえりゑん、京都では、えりまんが繁昌

世の中で一ばん美味しい料理も藝者がたべ、鮑でも蝦でも鯛でも

晝なほお芝居のやうに目映い光彩のもと まるで手捕・奪捕てどり ぼびどり

皿も小鉢も金糸銀糸の雲と雨、これも女たちの衣装のやう

——お行儀のわるい龍宮城の乙姫様のやうで

必要な物資だといふガソリンなどあれ等ほど不足してゐないものはない

お貨かねはちやうど水道の栓を捻るかのやう

呑み放題、流し放題。少し位大きい一地方の都市の財政くらゐは、

華族、大官、成金と御用教授等々の二號、三號、妾おまひものの

一撃一笑、咳拂ひとつ

お待ち下さい、これが世情といふもの お醫者さまでもお百姓でも

ことさら藝者と限つたことはない、紙幣にさへ變るなら 手放でお怡悦、
四十の坂を超えた懶け者が、急に人並の分別貌で馳け走り、ルンペンまで昨日の暗
い翳もどこへやら

とかく觀念とは、景氣につれ移り更るべきものなのか、
それで、いつになつても藝者にすたりはありさうにない
詩人の住める空席などこの時代の片隅にも落ちてゐないのであります。

曉闇の花

覺める 溽暑い雨に 疎らな聲に 新たに夏が死にかけてゐる か黒い夜明はすで
に集く蟲の韻となつてゐた 豪華な少年の夢から寤める 電氣すたんの光貧しき
を ああ わが青春の書は何處へ行つた……

孤光白い牀をば映らしゐる 被衾の襟ひえびえ爽やけく 起きて 窓明け放ちたる
厠に、蒼い秋が流れるやう 北に風雪防ぐべく 木々とは月の疎影を地に牽かぬも
のか――

蟲の音はや一律ひといろでなければ、それはせせらぎの疾き緩きがあり、植込の下間に對つて坐ると、穹そらなる五日月、星族ほしくらも、鶏の尾のやうな大棕櫚の葉揺れ、暗い窓邊に折に、過ぎにし青春——と、交替する時の規律を靜かに瞻ながめてる

はなよ 岩石の根にまだ美しい薄明の眠るかけ、けさも白く咲きつぐ車輪梅の花、貝よりも白い、蛾よりも平凡な、歡喜にも、まして陶醉にもあらぬ花（木斛もくかくの葉に似て灌木なるこの花）——青春を送りこの人生やうやく淋しきを、靜寂の道の安息のこの花、小我を殺さば、——ああ、かくて、低くとも心の聲が命ずるまま、背かず悔いぬ、索めずかくして一物をも喪はぬ、わが曉闇に配ひがつて坐る……

水 寰 區

山房初秋之圖

谿間みどりの夢を透く苔の華

夕の陽は分秒にして弱り行く……

岩を鑿り冴え凍つる水の万華鏡

雉は上枝はづえに 遠い山々の雪線

霧に燭して山房の燈の秋をはやき、

何處へかかへるころたなごころ この手心

北越古刹之情

月遅き夜の隈に葩散り逝き

藥苑の、いま文月といふ

斷崖に潮騒疎し…… はやき星河

この北空の螢と曇り

すずろなる旅愁うらひに似たる闇よの匂かほひ

また天上の星の愼おそましく、七夕せちやの前夜まへ

水寰區

この闇の

よしなしごとごとのこころこころするかな

病めるさの額かみにとまる汗あせの玉

巨きなる螢あせ流るる

河かに出いて

犬蓼いぬらふふめば 風かぜの脈すじ

圓まらなるもの果はなしと磧石いしふむなり

白しろみゆく夜よのおぞましや

面白や

若魚が浅瀬かかりぬ

さればこそ今宵はかなし、

つかのまことば恃めば

それも逃げゆくこよひはかなし

このいのち

吹かれ髪 石拾ひ石をなげぬる

川瀬のおとの祭もかなし

やみのよのはてなきに

それありてわれを傷ましめ

はるかなる思念の夜々につらなる

このやみのよしなしごとのごころするかな

この宵壞の中に

この年の暗き雨—— 代られたる

樹の木口 たそがれに

白い年輪をかぞへみる うそ寒き時空の裡

いまわがうらに應へもなく

まこと消ぬべき身の懐ひなり

山小屋の廢路にこの日頃散りおく黄の落葉、

飛鳥は薄明の刻を啼き伴れ——

なれど老いゆく時劫のままつひ消ゆともあらぬわが命かな

古雨戸打ちたる山の莊いづの
やがて吹きつゝのる爐邊の雨風のひま
とぎれとぎれ石斫る槌のごとき蟀蟋せせのこゑ、
孤燈ともしかかげたる古疊 頭擁かぶふれば
宵壤よひのこゑの中、——鏡かがみをゆく頭腦かみの芯
ゆるる石油燈の穗影のもと明るくあかるく澆しほはるる……

冬に入る

旅宿りよしゆくに鶏頭花けいとうがさいて
月が夜ごと驕あはつた

鶏頭花けいとうが萎しぼえてから、
山峽さんげつの星があかるくなつて冬となつた

又

心はあかるく

冬となつた

春 雨

そくそくと呑みて 酔はず

白々として夢さむる夜の情念 そのやうなものばかりが

この春にはほんものらしい

私は眞實を告げるのを恐れてはならないだらう

詩人の父を子の前に悔いぬため

春雨冷たく蒼き羈旅の床に 人の子の父となることの間近さに

闇の中のただひとすじ まぎれもない虚無の道の

夜更の涓滴を貫き

無の無とは道であつた

こ奴が面紗めんさを剥むいできたのか

おおこ奴が 今宵は見たれば

ひと昔前のことであつたか

はからずも犬のやうなる野心の女神につかへんと

世の戒律など心懸け

我が身上の虚無を殺戮したことのわろく

それがいま私をさいなみはじめてゐる……

根元を殺して虚飾の枝の葩など摘んでゐてはならぬのだ

無のほかのものすべてむなし

みせかけと伴りにすぎぬものに誑惑されてゐてはならぬのだ

それを笑殺したことの悪く

路傍に捨てられたはずの虚無は猶ほ還つて來た

人間生きようとする情感の中には

かやうに自らをいつはるもの多く入りこんでき

すなはち希望や戒律に目隠されやすくして

今日までに身を削つた苦しみや感懐の何もかも

そのためにいまは眞實に忝いのであつた

まこと友情の掌たならばかり積みつむ雪のやうに仄温か――

さうしてこの不眠の

私の脳膜には

舞姫のやうなあどけない少女の姿ばかりが映る……

行くこと絶えてなかりし宵のその青樓の少女給仕人

いざ女とあればどれもこれもあさましく厭はしけれど

なほ壊れやすき少女の美とはあるべきなのに

つひにそれも偽態の花とはあらう

しばし爽涼の谷底を俯瞰ろすことよひ少女と、友とわれ酒汲みてゐたれど

それと智慧づけられてはもう敵ふものではないのだ

かりそめなればこそその少女らを射殺し

無は無に住し、毒は毒にて制す

重き夜々の機構はかかる美えかなるものをさへわろき色に塗合せたれば

無の眞實につかへようときりきりと構へて見る おお——

不眠の幻視幻聴のなか展く

虚なるもののおくふかく歩みてゆけば 凶徴の鴉が

野の骨を咬むやうな眞實なる音を それを

今宵また耳底にきくのであつた……

エリゼエの第一書

父の門邊をすぎた。年老いた母のこゑを聞いた。その故里を出た日を私は知らない。みんな記憶のやうな……。

驕うまやじをよぎり、浦々をすぎた。細い渚があちらへいつも光つてゐた。

言葉が、「爾、さゆらげる葦に依ること勿れ」、——茜雲のやうに、さうしてまた耳許に降つた。照つたり吹雪いたりした。

嶮しい嶺がしばらく後ろにあつた日は、野川の曲りに葦草が聖母の眸のやうに咲いてゐた。

午であつた。着衣は吹雪の痕をとどめて。街の城壁が見え、悲しいほどにとほい穹窿そら、光りの脈に雲雀が啼き伴れる……

額の汗を拭き、拭き。野や、丘や——遠かなこしかたが睫毛の下にあつた、空には艱苦の足痕が一行に恪かれて。

それは花びらのやうに私の心こゝろにまで還つてくる、萌黄の草の褥の上で。空を賣む厚い闇がある。そこからまた一行にかへてくる今日の葩々がある……

私にエリゼエの野の非情の小鳥が來た！

候鳥

秋は蕭利の賦にして 透冷な氣圈に候鳥の線條が描かれる 白萩はすでになく 紫苑等の幽かに 黄なるまま苑にだりや萎ゆ ひとり驕るは鶏頭花 日輪はすでにあるか 曇るともなき海邊の晨に この色を塗るものは何か 蟲の音わずかにありて 風のやうに なべていみじき尾花等の光茫！ 御身來よ

このまひる海も青みあれば 波頭よく遊ぶ白鳩のやうに 網曳く漁夫等のかたみに

沈黙するヴロンズ それらを背に 假に純情の詩書をひもとけば たとへば病身倦みて世をば厭へる東洋の詩人の日記のやうに うち和むものかの山巖をいふべく 嶺すでに雪衣を纏ひ 我れに故土のあるか いま苦艱のあるか 忘れられて久しき雪の上の月のごと その日月のごと わすれたる懐ひみな

嶺かけてまた 候鳥！ 御身來よ 生きとし生ける哀歡を超えてこよ

扉

A

純白な壁の中では
私の宿命が朝から假面を剥ぐ

B

ページをくる身軽な私は

あばあとの玄關には嚴かな扉がある
朝々、それで不幸の重量を側る、煉獄の一日にむかつて……

沙 漠

刻が静かに身内をゆきすぎる

私の胎内に沙漠が出来る

爽かな薄明が翳のない街をくり展げる

思 慕

天上への歸念のやうな、電氣すたんだの灯を琥珀色に熱らすそれ……、日本の松風のやうな、古代色の薄紗かほたんではなからうか

テラス

太陽と龍舌蘭と噴水

第三部 「誕生と死」より

ある蟋蟀の唄

昭和十五年七月より
昭和十七年八月に至る

無題

なかなかやつて来ず
風が木末を吹き折るやうにくる死
しかも死は更に日常の匂ひをもつ
それは雨後の艸莖を染めなす光か
深夜に私をよびさます庭木と竹の葉ずれか
覺めてゐる夜の幻像をむちうつ雪の楚音なのか……

死はある夜のランプでもない 几案つくえでも
それだけの意味でもない

硝子がほのかに明るみ あけ方の死が
いとも明確な足取りで私の傍に行きすぎる ふたたび
どこをと定かには言へぬのだが

私はそれまで 知らぬ祖先の横貌を美しと夢に瞻めてゐた
その爽かな死！

時間の祝祭

時間よ……

時間は擁く、攝る、無垢なる者を。

黒の薄絹で緩かに纏ふ

朝は朝、夕べにはゆうべと

歴史は滌ぐ 歴史の方向を。

霧にはためく若い葉裏から 血に晴れる秋の鏡を

時よ 卽座にそれを私に裏返す

—— 覚悟はあるのだ、

悦びはながいながい夜明の後に來るのを

すでに充ち溢れた、北からの細やかな夕明りの裡に屈み

黄に降る病葉わづらば一葉、その核心に音たてる

まだ去りきれぬ一日は鷓鴣色の陽を艸の葉にまかせ

隋圓の硝子の偉大な天蓋の下で すべては怖れ急ぐ

とりわけ廻かな眼が、徐々に私を射すくめる

—— 平安は、事象への反省と、千の轉身の中にこそあると

そつと誰かがこの時間に私に囁く…… ひとつの蝶は

若き命を墮す……

黒い屍衣の翅を

細かに慄はせて　ここに開花をとげる、

二つが、かつて一つとなることとてなかつたこの私の空間では
私は總てを失ふ。

平野の鳥

平野の茅屋で　鳥が一羽啼き出した

その夏の鳥よ　——仰臥する私は梢の高さを感じ　私の胸は　量り知れぬ垂直な
ものの底にある　この底の底の明るい天候に　その聲は風に鳴る杉戸のやうに色氣
もなく盲執もないが

その夏の鳥よ　結局私も黒いお前とひとつのものとなる　お前のその聲のやうに
最初から何かに怖れ戦くことさへ

……これを初生の盲ひた私の靈魂として受取つてよいのか 混りけのない私の時
間に

けれど 風立てば波騒ぐ木々の精に誘はれ 鳥よ まどろみがやがて来るであら
う

私は 天上でも地上でもない半透明な私の齡よほと對きあつてゐなければならぬ
己れを生んだ最初の闇の縁りにゐて 細心な雪國のらんぶのやうにをののいてゐな
ければ……ほかの鳥々の短い飛驒のやうな聲々に打混ぜられ 過去も未來もある平
たい睡りの降つてくるときまで——

白日の假睡の瀬湯に漾はねばならない —— 休止符のない人と獸の邪念の積を今
日もまた一往復せねば

もめんの花

事變の日本に 木棉の花がさく それは
妻と女中の一畝の畠に播いた 棉の木の花
我等の先祖はこれを培え 紡いだのだが——

同じ日に高原からのもう秋の便り
——平地には朝夕の霧もなければ
夜 くひな も啼かぬ……

棉とは顔へる清楚な霧には似つかはしい 黄の花
野の晝顔の花でもないが——
人は知るか しらぬか

麻にも似た植物のこの形態を
生れいでて ここに火急な東洋の理を告げてゆきでもするか
このものどもと再び共通の宿命を語る！ かかる日に生れあひ

——慾をいへば

白の水干にでもつつまれ 私も
このときにありたいのだが……

秋

けさ 蝨と

鈴虫のふたつの旋律の交錯を

力づよい未明の雨が掻き消してゆく、

私はこの楚音の狙き俵を二度三度かぞへる。

——薄墨の縁り取る

アルミ色の、無数の雲の翹が、灼える平野をそこはかとな

一と日、鮮明な湖底のやうな、陰翳で淫してゐたが

それは季の行交ひがくるしむのだ

急に無能な、曉闇の園の中――

このけさの晦さをきびしき空洞と感じてゐると
他になにもなく

まこと私がこの秋の主人であるらしい。

秋に想ふ

○ 雨―― 雨かとおもふ

ものかげの芭蕉の葉ずれにすぎぬ
ばせうはいちはやく風を豫知する
裂ける、何も豫知するばせうは

○ 人のおとのふとおもふは

——濡縁にくる蝸牛のこにすぎぬ

——物體にひそむ無明のこゑにすぎぬ

何の花でもない そのとき ——ああ

黄昏どきの苔のあつみ……

それを佇む闇浮提金の蜥蜴の背にすぎぬ

○

壁とむかひ、背せなに描く私のゆめは——

虚空には神かと思へば

それは沈める秋の落す影、

秋の詩は まことはげしい未來あきの鑄る陰影

それなどは美はしと

詩人の言葉も血の滴々

しかし私一個がまたなんと

不肖の修身であることか

世塵の籬落のするせん花一花

朔雪こまに銅鞮こまのたちかみ

なほ 盛唐杜李二家の交情りも

それなどは美はしと攷へてゐた

雄叫び

厳正な意味で 私が冬と呼ぶのは ふゆ白く定まりしよりの
ただ一日 精研眼も文あやな また秋といふのは物體の翳も濃やかに垂れ罩めし
あの紫磨黄金の室 秋立ちしよりおなじく最初のひとひ——

けさ いつになく鐘をきく 幽かに

(いまは、峻しく慰樂なし、冬……)

野末の何處か 錆びきつた冬が このときに
枯葉一つ身にはつけてをらぬのだらう

疎らとなつた裸木の間をぬけ、鐘は朝あさなりいづる、
はるかなる音響のそのひとつひとつ

いま地つちの上なるとほき落葉はらふの嵩を思ひ

——眸あるその生體よ —— 匂ひのやうな 騒さわぎの混る

玄妙秘密の底に鳴る玉の音おとときき

清涼の波間を慕ひよる銀鱗のひらめきとも見る その餘韻あとのび

私の味爽の耳 わたしの脈管

矢猛やまじびのやうな候鳥わたりどりのながい羽音に 朝はやがてたしかとなる

この國土の氣候にゐて ああ、更に一つの叫喚をきく

純粹にこの玄理の土に生れいづるあらゆる日本の神々の
遠つ古につよく雄叫びを 私は微かながらに

ある蟋蟀の唄

冬に後れた蟋蟀のこゑは
受信する通信機のごとく 凍土地帯につぶやく機銃の如く
虚空 地のしじま
蟲どものまだあまた生ける雑音のなかに
はてしなく
はてしなく
ひくく 疾く ただまつしぐらに
翳々として つづいて

こほろぎはもはや唱はぬ
そこゝゑも　もう聲ではない
單なる響きだ　再び壯麗な秋の朧みくらくまでは
名もすでにそれに相應しくはない……

詩人はいまや歌はぬ　一種の蟋蟀せせりに似て
その金剛石の響きを光りもとどかぬ奥ふかく秘める

廢　園

籬外の墓地には　若き躑躅の花
眼しに刺しみ滲みて白く炎ええりたり
萬物萬靈の生ひ悶もゆるいまは五月
垣内の荒廢あれし池の水にも　紅き
つつじは散りてにじみたるかな
ものみなは人の心と俱ともに蒸騰じょうとうせり。
さまで廢れし庭にはあらず、
聞き心の窓の如く水は濁りて圓かにも

古びたる池の縁りにも溢れるたり。

こは今にても春秋は手入する庭のことなり されど

木靈木靈は荒びたり、殊の外庭樹好める祖母の逝きしより――

日夕この池邊をめぐる者あり 家にひとり

生くるは詩人なり

何物をも愛せず、命贏きを涕かずして

暗碧の天と語るは、己が卑きをこそなけばなり

かくて白晝の郷愁は神々の中にせぐり泣けり この池の墓の如くに

せぐり鳴けり 思慕は五月の生きのごとく炎かりき。

石間に藪みあふ、尾と腹と共喰らふ盲ひたる蜥蜴らのこの庭に 冬來れば

また木枯は夜々をめぐり吹き 池の面に星々を散らし

詩人の魂は業のこの地に戦く……

籬外には亡び去りたる名主の家の墓ありてそのかみの

低き墓石を並めるたり —— 人形を彫みたるあり

ぶざまにも圓筒状のものあり さのみ古きことにはあらね

されどはや一叢の眞白なる躑躅のそこにも伸びて新らしき時運を咲きるたり

詩人は転るを知らず 紡ぐをせざれば

戒律を識らず 夜々に 日に 池をめぐり

誣佞の世と さらに我と我身の闇の憤ほろし、

歲月よ 時は五月 ものみなは

人の心とともに蒸熱せり 歲月よ

破籬の外やぶがきの心のほかの草莽へる墓にもはやふたたび

若きいのちの花は火と しろく燄えるたり。

昭和十五年五月五日

豊
美
な
み
ほ
と
け

半獸的な鳥翔

私がこの机を拭ふは

書架や 押入や 時にまた廊下の

書籍につもる塵まで拂はねば 易々とは拭ふ心にもなれず

雑多な紙片が机には散り

この生命を生命とあらしむるには 背後の醜惡と切れねばならぬ、
醜惡と切れるとは何ごと？ 机が汚れてゐると私は家人に叫ぶ

浅黄色の空 網の目のやうな細かな梢から

去年の枯葉一葉が 舞ひまひ降つてくる

あでびとの咲容のやうに 光りに變貌するさむい玉より閑かに

それは私と 一幅の繪となる 枯葉にもかかる命はあるものを

これも惑はし尤なる生體 さそはれて微笑などしてもならぬのだ

窮極の光りには瑣末の風さへ邪魔の 邪魔だが 光りよ

御身世人と均しくほほえみを惜まず 物を吝み さらに分秒ををしむ

空よ 私と二人のぎりぎりの場で 私を擁き攝つたことも幾度か

——不斷に色と耀きを變へながら 詩人とあればそれも最早うたつてはならぬのだ

かくして幾年 —— 古來人はおもしろすぎる書をかいた そして偏狭な、

一切は詩人には面白すぎるので——

圓い多彩な石礫ばかり 磴々かろかろと鳴る波打際に
たえず遠近の失はれがちなる 旅の霧に霧警に私はしばし濱猫となる
半獸的なその翹つばさを そつと 洩れゆくあたりにのべる

しかし 詩人とあれば海鳥一つもたやすくは頷めてはならぬので、否よ
さらに剴切なるおもひけふ吾家の縁にゐて この峻たるなか
聖なる指の爪を 短く剪る、
世の純粹なる詩人には私はあらねば……

雪嵐の世の島

その島は海上一里
周回一里 至大の手が置きなした。
島は塵勞のひとびとには忘れがち
また巷人ちまたびとの喜悅のとき悲嘆のときも 暗碧の波のうへ
それはいつも茄子紺いろの愁へに忘れられ——
朝と夕べで光りをこそ更へるが、
洋上さらに遐かなひとつの火噴く島山と
この南の町を擁く柔和な山の背と背を

雪が色彩りしても陸を櫻が染めても

島には雪もみへず 花にもきそはず 矜恃にひとり

いへば さむげなる美をます……

半島の 枝のやうな岬々をこえてみなみへゆくとも その島は見え

容姿も次第に表裏一變するが、

汽車の驛からいつも降る

坦々としたバスの道から もう島はひだりに

底知らぬ典麗な波と

それ自身認容の智に整はれてゐて——

人の世の峠半ばを眞すぐに降下する齡に私があるゆゑか

年とともにこの瓊のやうな島を私はすきとなる。

ただにまみえるだけの望みで そして

その奥處に勝手な花綵など編まうとはもうおもはず、

阿堵物と表面だけのこの南の町に来て

愁然たる旅びととなる 世の塵に塗れたるままの軀で

今生における私の物語の一人の主人公にも似てはゐるが

ひと夜のすさみの夜語りにも忘れがちなる この玉の緒の島根をば

ただそのやうな島とさへおもへば足りるのか、

雪嵐の裡の人々……

人間像

鬚鬚とある雲間に迦陵嚩伽の鳥は啼きおち

萬朶の葩が黯く零せる 卑小な地上の人間群像

これは涅槃なるか それは蝶々賣り風船賣り鳥追の櫻花など

庶民徳川期の政策のにはひのかけで。

北野紫野に遊び小松曳く公達

直衣狩衣に小童を伴ひ牛車にてかへりくる。

觴を流しそのわが前に過ぎぬまと詩を賦し

譜すれば酒盃を掬ひて飲む宴げや

鳥合せ 艸合せ…… これとても

完結された時代の一つの野花の冠ではあらうか。

——燧石黒燧石もて石鏃をつくれる

石器石槍の時代から青銅の世までは

悠久な経過がたどられ、

幄屋から巫咸が莊麗な天體を巫ひ 瞽朦が

曠野の車上から天意を鑑へたりした

歴史の人々には外界の抵抗は苛烈であつたかと思はれる

自然と融和し 自覺と對立のすべてに稀薄であつた原史の時に

生物的な不安や奴隸的桎梏は

雪の歌は悲哀の髪を埋めつくした

その時間を 風はエリジオンの野から不幸と幸福とを運んでゐた
しかし、谷間には いつも旋回する無礙なる翡翠の星環が仰がれる
私はおもふ 己れを虚しくする智慧はひとり
人間のものであると 暗い荒涼とした春に。

たとへば鐵鎖の中に生れおちても 人間は智識の苑の裡であると、
神話の四つの時代から 葡萄は野に黄金の美酒を宣し

鳥は裂帛の叫びとともに神苑の林にうつつた 史觀の五つの時代をこえて
地表を蔽ふ血河のうへに 橄欖と棕櫚の葉をたかくかかげてゐた

——鎖を斷ち切つた者は かくて先蹤の智慧と犠牲に於て。

礦石にかはるに南方の粘土から とりどりなるバナジウムやチタニウムの
性格を抽出するは斬新可能な鋼鐵の技術なり、——といふ

緊迫した鐵の世の新刊書を面白しと措きて

子と縁より降り立てば花々は散つた

人間と、老いたる鯉共を裏むいま何ものもない 背反すべき尺度も

この氣候の土には——要約すべき箴言も 沉んや哀哭など

白く閑びたる潦の水に 今日も昨日も あつき酒もて子と眺めたる

あの南へ南へと軒昂と 碧落の雁の別離をほかにしては——

史觀の五つの時代は、歴史を黄金、銀、銅、英雄、鐵の五期に劃せるヘシ
オドスによるも、殊更にこの世界を上古ほどよしとする彼の歴史家の世界
觀には、この詩に於て關するところなし

背 景

この窓で 畑の縁りに生えた、温かさうな初冬の蓬等を見てみると
つくづく幸せな、——夢に溢れてくる さうして

さうだとすると私等の棲むところが悪いのかしら

豊美なみほとけ

切れながき眼かんばしき肩、豊美なる肉、

その中より耀き、

天平の時をまさしくいまに生きる、

み佛の波うつゆたかな胸が——

冷儼な生そのものと、仄かな暗かりが流れてゐて。

遷るときよの雑音とくぎられ、千二百年の

うすきその闇に外光はあをく、また灰色におもく潛み、

月光菩薩とは、美しきみ佛の名にして……

不空羼索觀世音本尊、焰と唐草すかしの光背の文様を見よ！
妖しきまでに深美な 潜光の中にたつ——

梵天帝釋天、金剛密迹、四天王など、それは丈餘の佛身の
内充し、外發する怒に凍えし形相 力と雄渾の交響曲
わが奥がの諧和にして。朱と綠青の剝落の痕のこる
古勁な、内陣の佛群像。

——月光とは豊麗なみ佛の名なる、日光と並びて
若かりし帝國のそれか、これは唐か希臘か
冷暗の罩める 作者不詳の素晴しい佛たち

唇邊にのぼる窈かなる力は悠久の意志か、
形を絶するもの、永遠に半眼にひらき

真にいざよへる月魄——

金剛合掌する月光の蒼き御手に血の透き

一切の深淵にして、——玄理か、甘美な懺悔か

亞細亞の牧歌か、測られがたきこの理念——

幽白く息づく背後なる闇を、

まこと天平といふ若き名の芳ばしく……

雨はるびせす
月

ここで、人と自然の葛藤を指すのではない
君よ、君の裏なる

もし半坪の空地のあるなら、そこに立て！

才と寶とともに乏しき窮みの詩人

あなたの心意をしばし遠く放ち

脳裏に、救ひもない草野を、青一色の凄絶のさまに描かぬか

さてこそ雨が降りそそぐ……君等と私の草原のまへに

季節はづれの冷雨の哀號極りもなく

嵐を練りのべては、

シャロンの渡守に三途の河を展き

そのままに、もとの霖雨にかへる雨月はるびせす

この濡るるカンバスに、

白は、飛雨に叩頭くしら百合 鶯はかつての流亡の

海に老いたるか、隻脚で漕はれて立つに——

君の傘を、しつかりと握れ 君の意像イマージュをあやまたず擁擁きしめよ！

嘗て君に快かりしものを回想かんがへよ

いまにして假虚しく粗謬粗謬なりしものを 濡れそぼつ雨に

騒亂の日に生を享け 泥土のこの道を

素朴な木笛のやうなながい聲のよぶあたりまで私は行く

この意匠の野に明滅する愛着の灯、慾望の灯にして 私の正しければ
それが自らを豊にするといふこと、そして

科學者もいま經國の倫理を發想し

詩人にして救民の構圖を念ふとき

私はみる、惡風に振れ伏す不敵な

艸ぐさの尖きを 耳もつて聽く

魔に渡した魂のありとすれば、その風にまぢらふ不協和音を

そして詩人の血のやうな青い雨線であるとする

いはけない蜻蛉は光をまとふて 薄暮の寶珠よりも

不思議にみてる眸で嵐に靜止してゐる、

蜻蛉も豫知するのか その葉先に やすらかな翅を伸べて、

——かくも凄愴な血の神祕によつてのみ地球は截然と生れ更るのを

無上の青い血液でのみこの古い畫布が塗りかへられる瞬間の近くあるのを。

昭和十六年九月某日

爽涼にゑがく

空の雲には深い陥穽がある

——雲には形がある

形をめぐる人間の燦たる架構

その白雲を瞻仰いで私は立ち

爽涼に擻んづる日向葵のやうに——

雲はひとつひとつ薄黒色の隈をとる 白翅のやうに

大氣には縞目なす陰翳もあらはに。

大氣はさまざまな願慮をめぐりに網抛つ その薄氷の色の絞
歴史は、生活は、生命は、生起浮滅は それに含まれる

雲の底の 己れの奇怪な倒像を覗る……

真深い個の宿恩、種の興亡の迹と未來などを

すするなる、まさに適切な想ひもてそれをまさぐる 雲の形のくらしい縁りに

とほくしてうつろひやすき刻 また色を想ひ その形なきがゆゑ

明晰な形態をとりうるものを案ずることは

赦されぬ疊惑であらうか

ちやうど蒼穹に擲つ腫のやうに 雲には暗い陥穽がある

——あながち涸渴した私の藝の假構ではなく、
日輪草ひあざのこの黄に立ちむかふとき 澄明な
爽涼にゑがく、鈴音の波紋のやうな氣質の溢れを私は感じる
晴曇概ね 空は人の季節の色に一刷子はかれてゐて！

花
の
中

石山寺の花

数々の命の腫のやうな蠟燭の

光りの散らばふ 石山寺の土間を辭し

薄暮に架けた懸橋のやうな

峨々とした岩石の頂をつたひ 踏に

もみぢ葉踏んで 帝の觀月の亭へ來る

こゝは歴茫たる水の秋

渺々たる海鼠色のその水の景色の

左手に終るところ、私の旅ごころはここにはじまる

冷い岩石の喰ひのやうな 向ひなる田上山は

薄明の様様の鱗形をその山肌に押形として、

私との距離を埋めてゐるものはいまなにか

私は立つ、薄暮の人としてすべて虚ろなものの上に 山懐に不動尊を祀るといふ

凡調な山に對して、——焦心に似た心で

自然は必ずしも卓抜でない 人生必ずしも綵帳の如きではない、

凡々とあるこの旅衣に

失望した神がなにかを索めてゐた

それは、風羅を着るかの俳聖なる人の 歇むにやまれぬ

白々と切ない悲願の秋かしのれない
主として黝い空漠がある それにまぎれぬ色と
ひかりが 青い病葉のやうに散らばふ、空しき土のうへに
磊々とある岩に 天地と乾坤をとほして……
ここにあへて正圓の月を待つまでもない

○

昏れひとときの山に對ひて三井寺の鐘はここにとどかずして
そこに空白の 華がさく！ —— 田上山の胸に 私わたしの心に
真空のその氷の花が 天地の素練の一條の切れ目に
寂然ひらと咲く定ぢやうのはな これだ 暮靄むらさきに旋回するばかり……

峠

乗合は佇つた 山の蔭
冷えびえと暗い峠の茶屋の
老婆は自然生じぜんせいを剝むく、
傍らには自在鉤
爐に火はまだ燃えてるぬ

ここは展望のない山の中
標識しるべに、これより奥野へ」と、——

春ならば山櫻咲くところ 雉子啼くところ

山蔭はいま龍膽の季節、

小暗い茶屋の中を眼放たず

バスの窓から私は眺めてゐる

運轉手と女車掌は

瓦斯發生機に木炭を詰めをはると

老婆と何か昵懇な口をきいてゐるが

手拭を高く被つたその婆は、手さき息めず

——どういたしまして、あなた」と

これは明晰な都の言葉

面も揚げず、口許の世辭笑ひ

老婆は自然生を切る

それが一人の分量には多すぎるので

夫の柚の山辨官か バスで工場へ通ふ息子のか

娘の歸りを待つ、年老へる母の心遣ひか、

芋は膝先の鐵鍋に投げ入れられながら白く光る。

その夜々も藤色 人寰はなれたこの山の中にも

華やける譚の待つところ……

ナチスドイツの童話なら、これは森の老婆

雨風の精のやうな老婆の前身をば

誰しも一應は考へもするだらう しかし

バスは出る、第二の峠へむかつて——
人の眼が狭い猜疑とならぬまへに
——放心したやうになほわたしは眺めてる
小暗い花に冷えゆくその茶屋の内部を、
このごろ急に明るく健康となつた一人の旅人の眼を
不思議なものやうにその背後からながめてゐる私を
おまへはまだ知るまい——

法燈の空

ここは切々たる水の秋、法燈のゆかりの町。山門に仁王は、濁びた白晝の夢を食むばかり、刮つとしろい眼球を睜くばかり。

ここは蛋白石の色の時。古りし紅殻格子の家々は、傳統の黝い油障子を、湖近き陽脚に閉す。

傳統のくろい障子の家々は息を窺め、模糊たるうすれ陽に、頑く寄りそひ、——
旅いくひ、けふまた一つ寺門を潜り、背ろ山なる見晴に、一眸の水をあつめて、寺門を立出づる……

山端やまばたに茶枯れし二王は、口あけ、口をつぐみ、ひち張り、磯巾着の花の如き、忿
恚を眉間に聚む。朱の剝落の、阿吽のその花はたかく、修法の鎮護ぞゑまし。ここ
は、「湖水に泛ぶ七小町」のひとつ、歸花もあるやと、並木紅葉のこずゑに、假初
のしろき星をたづねる。

門前の町に瀾ねき、薄き射光の、雨ともならう、たびひとひ、湖うみに来て、腫底まなぞこに
ねむる黯き家々。睫毛に纏はるただに羸つかれし、ひかりの青に、——衝つちに、はたはた
と旅衣の塵をはらへば、塵にはあらね、小天使達、よりより法燈の古き空へと還つ
てゆくばかり……

十二月八日の一家

天日は部屋内に流れ入った

私は香を炷きに立つ——

衝撃が激しいので、

心は處女雪よりも皓かつた 激動の縁りに

一瞬千の萬の 想ひが花冠を着ける

「我が航空部隊は銀翼を連ね、敵の
有力なる中心部に向つて作戦中なり」

親子は一つの屋根の下で

言ひしれぬ感奮のもとにかほと額を聚めた、

御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時に

あへらく思へば

海犬養宿彌岡鷹應レ詔歌一首に倣ひ——

昂奮を擴げ歌まぬラジオの傍に。

168

——かかる時人の言葉といふものの無力がもどかしくて

親子は座敷の中央に端坐するばかりだった

爽かな香の匂ひはあまねく物にゆき互るばかりだった

眞實に終ることのないこの歌！

暗緑の野を越えて 光は霧氷のやうに

室内の物體と靈のすべてを飾った

それは日輪なるものの雄渾に

一家は誕生と死の一日の聲に聴きいるばかりであつた

私は國土の夢と豊饒な日本の神話の全部をしんじた

西南太平洋の森嚴をこえて漾ふ

私は滄溟の鳥となつてゐた —— 青い内光の水脈に

一つのけだかさに五歳の兒も額をあつめた 青史の陽おもてに。

169

山上の歌

——十二月八日の詩——

大詔の降りしとき 家を出て私は歩んだ

山懐の徑を小山の頂まで一すぢに

巷に叫ぶラジオを遠くなしつづ……

——吾等 互ひに愛することがすべてである

——この土こそは皇天の鏡の裡

山々のただずまひにして 神の裳裾

黄楡は數千年の無心の純血を 谷間の薄き冬日に萌やす

ここに暗澹として顔がある いまにして告げしめよ

一木一草といふ語に 永遠のそのあらたなる意味を汲むを

彼の坦らかな山頂を歩む雲は 日の本の神のみ足

滄溟にかたむく帆は 純粹に 開闢の神の帆々と。

愛とはこの土にして 靈は夢む 神話の水脈とひとつに

國土の上に吾等 血の柱とたたう日 人の愠へは

相愛することの稀れなればこそ

——吾等至上なる星辰と俱にあるなれ

——日の皇子の邊にあるなれ

あたらしき天日の下この純潔 私はおののき 私は昂然と彼の白波の神とあそぶ

參差たる松が枝の下 神の庭なる古き血族の瀛に誓ふ……
皇天おほぞらの苦惱の翳曳く山懐のつちに
日の本の野鳥は うつろひ易き冬の時を啼き移れど、

永遠が ああ一瞬の上にかさねられる……これが空疎な言葉か

私は想ふ 同胞を生めるこの國土にふる、

火の箭のことを一つに愛すものよ！

來る春に芽生ゆる實は 墜つる鳥は けふあらたに生と時劫とを超えてゐるのに
われ等盡を瘡はう 苦惱で充たさう

欣慕と歡喜の雄渾な日ばかりとなつた 大王のもと ひとつに愛するものよ！

雪の貌

星港しんがうが陥ちてから

雪が 三度降つた。

星港が落ちるよりさき戦果は

スマトラへ擴大された。

世紀の耳目を衝いて落下傘が

赤道の空、海を綴つた ああ

惟神の臆おそ 民族のいとも自然な方向として。

雪をゑがける繪師の筆の

古來素朴なりしを思ふ、

能褒野の陵墓から飛んだ白鳥の

高く たかくとべるを 南への

尊の御遺志となした先史家の筆を想ふ。

雪に明けた 數々の

血の近世史の精神を。――

雪に晴れた日がほのぼのと丹田に響く そのかげに

困難なりし日本の聲を聴く。

十年このかたの昏迷の日に逝つた

若き友どちの 拙きえにしの上をいとほしむ、

私たちが父祖の日よりも卑小でなかつた

歴史の運行に涕く……きえゆく雪に

痕形もなく消えゆく雪のいのちに、……矛盾の限りを

昇華しつゝ來た 大和男の子の無垢の持續を思ふ。

昭南島の世の春に、あはれ眞白なる花を頌める、辱なさをしめて

捷つことの一事の前に擬せられし

詩人の筆のこの鋭さを祈る！

二月十四日午前、急降下する機から撒かれた、燦たる空の最初の歩兵部隊は、奇襲降下に成功するや濕地帯、ジャングルに突進した。妹尾中尉部隊は途中敵兵を充したトラツクに遭遇し、またたく間に、これを殲殺した。他の大城中尉の卒ゆる一隊は部隊長自ら

腹部に一弾を受けながら、敵中に斬り込み、即ち敵裝甲車は中尉の豪勇の前に白旗を掲げ、同中尉はその裝甲車によつて飛行場に突入。午後六時かくてパレンバン飛行場は我に歸した。これ星港陥落の前一日。吾が記憶と恆に新らしき感激のために之をとどむ。

花の中

紫の峽の空には梅の香が漾ふ 悲哀が深ければ

いよいよ深く塗られる空

——日向ひの一枝が餘り白いので

人の生よは恩寵の高さに

悲嘆に昏れる

いつか吹雪となつてゐるやうな

梅林の意匠の裏を透して睹ても

あまり清楚な 點描なので
にはかに素朴な夢路を行くよりほかはなくなる
死と搖籃のうたに歌はれる……

花のなかには なかなか眠らぬ豫言的な
ひとつの神が醒めてゐて！

會ひ難きもの

豁然つと打割れた天は、低いやうに思はれた。高原はもう冷く、富士が、峠の間にも見えてゐた。額に紅い陽は偉いな輝きに満ちてゐるが、それは忽ち夜となつてゆく。

黄昏に、私は、繪の櫻紅葉の路に行く。來ることのおそかつたのだ、あたりにあるものは、みな再び會ひがたきものの表情に押黙つてゐる——くることの遅かつたのだ、不惑のいまにして……

この並木路を歩いてゆくとき、あへるものにもまた避へぬものにも、相遇ふことの出来るのだ。心の奥のどこかに人々の杳い名をよぶものがある……薄明の呼ぶ一齊電話で。——私は充ち溢れる、私は、咳く、人には人倫があつたと

踵を返すと星が隕はれる、薄明りの原の上へ。——戦ふことは、その世界に擁かれることだ。漠ろい夜は徐ろに歌にみたされる。夜は、誰にも隷屬しない言葉で語つてゐる、消されゆくものの歡喜を、夢を、……再び消されることのない新鮮な衝動で、わたしはそれを書きなほしながら！

秋

冷